

課題①変なお店

新入社員の工藤は先輩の菊池と外周りの営業に出ていた。真夏の太陽が工藤と菊池をジリジリと焦がす。

「暑いわね……。そろそろ十一時半になるし、どこかでお昼にしよう」

菊池の提案に工藤は頷いて即座に賛成する。

「なに食べたい？ この辺あんまり詳しくないのよね」

「暑いしできれば歩きたくないです。あ、あそこ」

工藤は周囲に飲食店がないか見渡してみると、道の反対側に“ランチ”と書かれたのぼりを見つけた。すぐそばに信号もある。

歩きたくないのは菊池も同じだったようで、工藤が見つけた店に入ることにした。信号を渡り、店の前に着くと味噌汁のいい香りが漂ってきた。

「定食屋みたいですね」

「暑いけど味噌汁は飲みたくなるのが不思議だわ」

菊池はメニューが書かれた看板をチラッと見ながら店内に入っていく。工藤もそれに続いた。

店内には誰もいなかった。

「あれ、開店してない？」

工藤は胸ポケットからスマホを取り出し時計を見たが、十一時半は過ぎている。なにより入口に「営業中」の立て札がかけられていた。

菊池が「すみませーん」と声をかけても誰も出てこない。営業中なのは間違いだったのか、工藤が店を出ようとしたところ、入口の引き戸が開いた。

「おっと、先客か」

入って来たのはポロシャツ姿の中年男性だった。首にかけたタオルで頭の汗を拭っている。

工藤と菊池が戸惑っているのを察したのか、男性が気さくに話しかけてきた。

「ここ初めて？ 店員いなくてびっくりするよなあ。とりあえず好きな席に座りな。そこに説明書いてあるから」

男性はこの店の常連のようで、入口近くのテーブルに腰かけた。

「さっさと決めないなら俺が先に作っちゃうからな」

作る？

なんのことか分からず、工藤と菊池は顔を見合わせる。

突っ立っていても仕方がないのでキッチンからほど近いテーブルに座ることにした。

テーブルにはメニュー表が一枚置かれていた。定食屋にありそうなメニュー名と価格が書かれている。

「焼き魚定食五百円って、すごい安くないですか？」

「生姜焼き定食なんて四百円よ。どういうことなの？」

外でランチを食べようとすると千円では足りないご時世、あまりの破格ぶりに二人はますます混乱する。

メニュー表にはメニューだけでなく、注意書きも書かれていた。気づいた菊池が読み上げる。

「調理・配膳・後片付けはセルフでお願いします。お会計はテーブルのQRコード決済をご利用ください」

同時に、キッチンからフライパンでなにかを焼く音が聞こえてくる。フライパンを持っていたのは中年男性だった。

「この生姜焼きの味付けは美味いぞー」

ガス火にさらされる男性の額には汗が滲んでいる。それを見た二人は再び顔を見合わせた。

「安いけど、ここでも暑い思いして自分でご飯作らないといけないの？」

「でもまた外出て店探すの嫌ですよ。生姜焼きのいい匂いするし」

店の営業形態に突っ込みたいことは多々あるものの、二人はワイシャツの袖をまくった。

講評

工藤の性別以外、最低限のガイドは書かれており、状況は掴みやすいです（菊池の性別も明言はされていませんが口調で察せられます）。工藤の性別も服装などで分かるようにすると良いでしょう。

肝心のオチですが、文字数が足りず尻すぼみになっている印象があります。二人がお店にツツコミを入れるシーンを入れられたら良くなると思います。